

種時權兵衛著  
農學士  
前年十一月  
海雪庵思ひ出しの書





25-947



農學士種蔣權兵衛著

二十年前の學生自炊生活

螢雪庵思い出の記

明治  
43. 6. 24  
内交





庵雪盤前門寺央中



荃雪庵主

小松萬宗禪師の靈に恭しく本書を捧ぐ

著

者



はしがき

権兵衛辱くも某縣技師、農事試験場長、農事講習所  
長、輸出米検査所長、縣農會技師兼幹事といふ法性  
寺入道然たる、肩書を持つて居る身でなかく、以  
てこのやうなものを書く閑日月などのあるべき  
ものでない。こんな隙ひまがあるくらゐなら、農書の  
一冊も書くが肩書に忠實なるものゝすることだ  
など、ソソジョソコテより御呵おしかりも出さうに思は



るゝが、權兵衛開き直つて、こゝに辯解を試むる次第でもないが、實は今春五十餘日の間引續き、農村改良の講話に縣内を巡れる際、宿屋ぐらしの無聊の折々、チヨイ〜書き綴つたものが斯く巻をなすに至つたので、敢て之れが爲めに職務をないがしろにした譯ではない。

權兵衛はこう見えても、未だ回顧を樂むほどに老耄せぬ積りではあるが、たゞ一と度、懷を舊時の螢雪庵時代にはせる毎に、覺えず獨りて微笑ほえまれず

には居られぬ。又た此頃の學生々活と、權兵衛等學生時代の生活状態とをくらべて、今昔の感に堪へぬことも少くないので、屢妻や子供を相手に、冬の夜長を語りくらしした、其あらましを、昔の合宿仲間の思ひ出の料にもと、之れを紙に上せた次第である。

たゞ思違ひ人違などで、思はぬ所に迷惑を懸かる様な事もあるかも知れぬが、何分二十年昔のことを思ひ出のまゝに、書き綴ることなればと、どうぞ大



目に見ていたゞきたい

休道他郷多苦辛

同胞有友自相親

柴扉曉出霜如雪

君汲川流我拾薪

(廣瀬淡窓)

凡例

此思ひ出の記は學生時代に於ける著者等が好んで營んだ自炊生活六年間の赤裸々史である。

今から思へば、アノ場合に斯くせば更に面白かりしものをと、思ふ節せつもないでもないが、それでは編述の趣旨に背くので、本書に於ては一事の拵へごとも挟まぬ。随つて小説のやうな奇もなく、妙もなく、まして教訓的意味などが含んで居らう筈がない。實際やつてきた我等でさへ、顧みて隔世の思をするくらゐであるから、立派な紳士たる今の學生諸君よりみられたならば、こん



な馬鹿げた、而かも亂暴なことが、よくも思ひ切つてやられたものよと、不思議に思はるゝであらうが、然しこんな事は我等の時代には、決して望ましいことではなかつたのである。これから考へて見ると、今日の學生が進化せる事の著しき、眞に驚歎の外なく、邦家の爲め、誠に目出度い至りと、權兵衛茲に謹んで御慶を述べておく。

明治四十三年三月末日

權 兵 衛 五

—(2)—

目 次

\* \* \* \* \*

一	螢雪庵の由來	一
二	お經の稽古	四
三	泥棒騒ぎ	八
四	第二次泥棒騒ぎ	一〇
五	黒 玉	一三
六	無性第一世 M 君	一五
七	コムハニ	一七
八	無性第二世 Y 君	一九
九	N 君の晝寢	二三

—(1)—



\* \* \* \* \*

一〇 葱の味噌汁……………三三

一一 食卓雑事及食費……………二五

一二 餅米の飯……………二九

一三 小豆飯……………三三

一四 馬鈴薯常食實施案……………三四

一五 正月の雑煮……………三七

一六 喧嘩……………四〇

一七 食堂突貫……………四四

一八 汝の額に汗して汝の糧を喰らへ……………四七

一九 金比羅様のおそなへ……………五〇

二〇 佛前の菓子……………五三

\* \* \* \* \*

二一 西洋梨の實驗……………五六

二二 植物界のクロンウエル……………六一

二三 捕虜……………六五

二四 小便の一斉射撃……………六九

二五 武士の情……………七二

二六 測量實習……………七四

二七 I君の蒲鉾……………七七

二八 消極的節儉の餘弊……………七九

二九 さうどう宗……………八二

三〇 腕肉の歎……………八六

三一 夜廻番……………八九



\* \* \* \* \*

三二	常山溪遊記……………	三
三三	障子の隧道……………	六
三四	臺所の下駄ばき……………	一〇
三五	馬糞の誓……………	一四
三六	教室の人造雨漏……………	一七
三七	先生のへ出し……………	二〇
三八	今日はもう教へません……………	二一
三九	雪投げ……………	二三
四〇	螢雪庵の寂滅……………	二五

生者必滅會者定離

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

\* \* \* \* \*

### 貳拾年前の學生自炊生活……(螢雪庵思ひ出の記)

農學士 種蒔權兵衛著

#### (一) 螢雪庵の由來

札幌の中央なりの精舎とりに、中央寺といふ大きな禪寺があつた。任職は頗る氣概に富み、學識亦た凡ならぬ小松萬宗老和尚で、其當時の札幌農學校の學生が、相率ゐて基督教徒となるをいたく憤慨し、學生濟度の目的を以て、明治二十二三年の頃其門前



\* \* \* \* \*

に合宿所を設け、之れを螢雪庵と命じ、鍋釜は云ふに及ばず、諸道具一切備付けて、希望の學生を入庵せしめた。誠に奇特の至りである、我等貧書生は早速馳せ参じた次第だが、さて入庵して仕舞ふと、此の老和尚の特志などには一向頓着なく、不埒にも、基督教徒となるものが續出したので、實は權兵衛も在庵中に洗禮を受けた一人である、和尚頗る平なる能はず、六年許り存續の後、終に廢庵の引導を渡さるゝことゝなつた。

此六年の間、此庵に起臥した學生は、前後三四十人もあつたと思ふが、其中には今や獨逸歸りのチャキ、大學教授もあれば、羽振芽出度き鐵道技師もあり、樺太や府縣などの勸業課長で御座

\* \* \* \* \*

ると、しかつめらしく泥鰯鬚をひねらるゝ技師連もあり、また後生大事に、農事試験場長や、農學校長などを勤めらるゝ先生方もあり、或は外交官となりて遠く海外に遊べるもの、さては又たボケット膨らせ専門に實業家となれるものなど、實に十人十色ではあるが、兎に角、何れも相當に立身出世し、而して其多くははや四五人の子供の親爺となつて、幸多き家庭を結んで居らるゝ。誠に芽出度い至りである。權兵衛茲に謹んで、當時の合宿仲間の健康を祝し、天の恩寵其家庭の上に、いや増しに滋からんことを祈る。



(二) お經の稽古

螢雪庵設立の趣旨に基き、苟も此庵に起臥するほどのものは必ず毎土曜日の夕方に盤若波羅密多心經、及佛說何とか經といふ二冊の經文を携へて、寺へ參集せねばならぬこととなつて居た。講師は西山某といふ、童顏清楚、頗る敬愛すべき老禪師であつたが、何分にも、其講義は俗の俗なる我等には徹頭徹尾わからぬ、盤若之れを大と云ふ、婆羅密多之れを何とかと云ふ、日面佛、月面佛、喝など、類に青筋たてゝ熱心に講せらるゝのだが、佛性に乏しい我等には一向に感じがない。庵へ歸つて、『オイ君わかつた

か、わかつたら説明したまへ』と云へば、『説明などが出来るものか説明の出来ないところに禪の妙味があるのだ、喝』など、云ふ連中より、そろゝなまけ出して、『今日は僕、止むを得ぬ用がある』とて外出する横着者や、『僕、今晚は腹痛してかなはぬ』など、云ふ俄病人などが、だんゝに出て來て、參集甚だ振はぬやうになつた。萬宗和尚之れを甚だ遺憾に思ふて、終には晩食後の時をはかりて、講師を螢雪庵へ派遣せしむることとなる。和尚の熱心にはだされて、暫しの間は謹聽して居つたが、之れも長續きはせぬ。天氣のよい晩などには、早やめに夕飯を済まして早々に逃げ出す。唯だ困るのは雨降りの日で、外へ出て仕



\* \* \* \* \*  
 方がなく仕様事なしに聴講の難にかゝる。それで何とか此難  
 をよける工夫があるまいかと、一同寄つて文珠の智慧を絞り、  
 『押入隠れ』の妙法を案出した。晩食後、腹ごなしに腕角力、座  
 り角力、枕引きなどで、ワァー〜と云ふ大騒ぎの最中でも、それ  
 坊さんが来たといふと、猫に出られた鼠のやうに、大急ぎに押入  
 へ隠れ、中からしつかり戸を押へて居る。坊さん来て見ると誰  
 も居らぬ『タッタ今迄賑かであつたが』などと、聞えかしの獨  
 言をいふて歸らる、坊さん戸口を出た頃を計つて、『オイモウ大  
 丈夫だ、出る〜』と怒鳴る。『オ、おいで、したか』などと、坊  
 さんに戻られ大失敗をやつたこともあつた。こんな次第で、和

\* \* \* \* \*  
 尙も濟度し難き奴等とあきらめ、お經の稽古は三月足らずで、お  
 やめといふことになつた時は、氣の毒やら、有難いやら。

讀書切戒在荒忙	涵泳工夫興味長
未曉莫妨權放過	切身須要急思量
自家主宰常精健	逐外精神徒損傷
寄語同遊二三子	莫將言語壞天常

(陸象山)





(三) 泥棒騒ぎ

いま臺灣鐵道技師を勤めて居らるゝ、極く／＼眞面目で有名な  
S君、或る眞夜中、泥棒泥棒と大聲に怒鳴り出す。一同喫驚り蹶  
起して同氏の部屋へ駆け付けてみたが、ド！モ泥棒の這入つた  
様子が無い。S君に泥棒は何處だと尋ねたら、暫らく考へて、或  
は此押入へ這入つたかも知れぬといふ。如何にも押入は少し  
ゐいて居る。氣早の某君、傳家の長船だか何だかの大刀を眞向  
に振りかざし、押入に向つて『泥棒出る、泥棒出る』と怒鳴るも  
シンとして手筈がない。『オイ君其刀を引込めなくては泥棒は



\* \* \* \* \*  
出て來ぬよ』と、誰れか注意する。如何にもと之れを納めた  
が尙ほ泥棒は出て來ぬ。こは、押入を覗のぞくに誰れも居らぬ。  
之れより先き、S君頻りに沈思熟慮の態まはなりしが、『ソソなら夢  
であつたか。』

世の中をわたりくらべて今ぞ知る

阿波の鳴戸に波風はなし



(四) 第二次泥棒騒ぎ

敢て門戸開放といふ次第でもなかつたが、螢雪庵の玄關口も、裏口も、満足に戸がしまつて居る日としては殆んどなかつた、夜中お廻りさんに呼起され、戸締りの注意を受けたこと、或る冬の夜の如き、一と晩二回に及んだこともあつたが、如何せん、踏み固めたる雪は、戸の内外に平らに積つて居る次第で、戸の開閉など、一朝一夕に出来る譯のものでない。若し夫れ北海の名物たる、朔風雪を捲いて、咫尺も尙ほ且つ之れを辨せずなど、云ふやうな時などは、玄關は北向きであつた、雪は遠慮會釋なく、玄關口より舞

込んで、廊下を通り抜け、裏口より飛び去るといふ有様で、如此き時には、廊下も履物御免の實に止むを得ぬこととなる。前の泥棒騒ぎのあつた翌年であつたと思ふが、或る冬の寒き夜一同寢静まつた頃、ミシリ／＼と裏口より忍び込んだものがある。今樺太に居らるゝT技師君之れを聞き付け、泥棒泥棒と怒鳴りながら、棒チギレか何かを持つて真先に飛び出す。泥棒驚き、跡白波と一目散に逃げ出した。ッラ逃げたといふので一同跡追かけて、隣りの酒屋の前に追付き、こんなことには氣早のN君(某農事試験場長)いきなり二ツ三ツ拳固を喰はす。泥棒意氣地なくも雪の上に坐り、手を合せて頻りにあやまる。よく／＼



見れば、時々見かくる跛の乞食である。戸が明け放しになつて居たので、空屋と心得、餘りの寒さに、一夜の宿を借らんとて這入つたのだといふ。

うらく／＼とのどけき春の心より

匂ひ出でたる山櫻かな

(賀茂真淵)

(五) 黒玉

當時庵中での先輩たる且先生(大學教授)性頗る晝寢を好む。或る時先生例の通り晝寢した。頃しも夏の眞最中で、暑い盛りであつたので、脛もあらはにと云ひたいが、實は尻もあらはに、而かも先生は元來放牧式なので、其股間より二個の赤玉が後方に絞り出されて居る。餘り見事なので、權兵衛試に其玉へ目鼻を書いたが、滑らかで脂ぎつて居るので、うまく墨が附かぬ。度々やつて居る間に、玉は勿論其附近一帯を眞黒にして仕舞ふた。此事が豫想以上に先生の逆鱗に觸れ、權兵衛に鐵拳を喰はされ



ば止まぬといふ意氣で、追つて來たが先生と同年輩たりしN君  
〔某農學校教諭ルーズベルト然と、庵の爲め平和を主唱してくれ、二  
十錢のキンツパで、幸に頭に瘤を出かさずに濟んだ。〕

落花飛絮滿烟波

九十春光去似梭

蹤跡年々何處覓

一回白髮一回多

（吳毅人）

(六) 無性第一世M君

M君(實業家)の無性は、實に同室の仲間泣せであつた。在庵四年  
の久しい間、同君の箒を手にしたのは幾度あつたらうか。同室の  
者も餘りの事に、或る時一切部屋の掃除を止めて、以てM君の反  
省を促すことにした。處が幾日たつても、同君は紙屑かみくずの中に平  
然として動かざること山の如しである。君は衛生を知らんの  
乎と問へば、憚りながらカッターのハイシオンなどは暗記して居  
ると云ふ。同室の者も遂に根氣負こんきまひして掃除をすれば、矢張り氣  
持よさそうな顔して居る。權兵衛も一度同君と同室したと



\* \* \* \* \*  
があつたが、今も尙は大語徹底し兼ねて居る權兵衛には、あの時のやうに、毎日腹のたつたことはなかつたのである。

少年易老學難成

一寸光陰不可輕

未覺池塘春草夢

階前梧葉已秋聲

(朱 熹)

(七)

コムパニー

\* \* \* \* \*  
月の始で懐ふとこころの暖い間には、コムパニーと稱する一種の臨時菓子共同購買組合が、庵中に屢々組織せられた。而して菓子屋へ派遣せらるゝ全權大使は、ヂャン拳で、其都度任命する事となつて居る。或る夏の雨しとくと降り續く、鬱陶敷い日に、全權大使の重任が不運にもM君に落ちた。君容易に動きさうにもなかつたが、一同が承知しないので、無性ふしやう無性ふしやうに出て行つた。處が其買ふて來た菓子を見ると、ドーモ少ないやうである。M君道々少し許り失敬したのだといふ。なか／＼少し許りではないの



で、M君に賠償を命じたが、M君は錢がないから物質的には賠償が出来ぬ、依て此後のコムパニの全權大使は一手に引受け、勞力的に賠償することゝしやうと云ひ出す。然し之れは頗る危険の至りであるので、爾來全權大使の任命には一切M君抜きのことと決議し、賠償もウヤムヤの内に終りを告げた。M君壁に向つて低語して曰く『我謀成る』と。

うき草にかくれて池のうもれ水

はらへば下に月のありける

(後九條内大臣)

(八) 無性第二世Y君

無性第一世M君に次いで、不肖の名を辱かしめざりしは、實に無性第二世Y君(某縣農業技師)であつた。但し同君は部屋の掃除などでは同室のものを苦しめるやうな不心得の仕業はなかつた。唯だ其の身體の不潔さと云つたら、實にアイノも三舎を避けるばかりであつた。同君常に云ふ、『我が嫌いな事は第一に入浴する事、第二に死ぬる事である』と。而して毎朝の洗面の如きも、眞に申譯に眞似するに過んで、其頸垢の如きは堆積又た堆積、自然的に剝脱する外は、之れを除くなどゝいふ不自然的



行爲は斷じて之れをせぬと覺悟して居るのである。而かも同君もM君同様ハイソンの試験答案などには常に高點を得られた方であつたので、説くに甚だ始末が悪い。然し如何にも庵中一同の到底辛棒し切れぬは其異臭で、相並んで食卓に就く時の如きは、實にたまつたものでなかつたので如何にせば同君を入浴せしむるを得るか、一同の常に頭を惱した問題であつたが遂に適當の解決を見ずしてしまつた。爾來東西相別れて見ざることに幾年の後、其潔癖家に豹變せるに驚き、『どうしたんだ』と問へば、『士相見ざる事三日、當さに眼を拭ふて之れを見るべしだ』など、エラそうなことを云ふて居つたが、『蓋し妻君巧

妙の手腕、君をしてこゝに至らしめたのだらう』とスツバスケは、同君苦笑頭を搔く。

月華星彩坐來收

山色江聲暗結愁

半夜燈前十年事

一時和雨到心頭

(杜荀鶴)



\* \* \* \* \*

(九) N君の晝寢

N君某農事試験場長はH君以上の晝寢好きで、春夏秋冬晝寢を廢した日は、蓋し極めて稀であつた。而して其寢像の悪いこと實に無類で、常に敷布團を置き去りにし、一枚の掛布團を持參し室内を隅より隅へと歴巡す。或る日其布團の一端、爐中に入りて燻つて居るので、隣室の某君に喚び起され、こぼして曰く、『起さずとも消してくれ、ばよいのに』と。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

(一〇) 藜あかまの味噌汁

或朝、日既に三竿といふに、未だ飯の仕度したくに取り懸るものがない。詮議してみると、今海外領事館に居らるゝS君。當番たるを忘れて、朝寢を貪つて居るといふ始末。S君起さる、當番だぞと怒鳴られて、あわてゝ仕度にかゝつたはいゝが、飯は出来ても味噌汁に入るべき汁の實がない。裏へ出て見ると、頃しも秋の半ばで塵捨場ちりすてばに一本の藜が七八尺の高さに茂つて居る。S君兼てブリガム先生より佛蘭西邊では藜を蔬菜として栽培して居るといふ事を聞いて居る。よきもの御參ごさんなれと、其藜を切り倒し





\* \* \* \* \*

枝の先きくを摘み取り、之れを其儘汁の實とした。飯が出来たといふので、一同食堂へ集まると、へんな汁が出る。汁の色は眞さ青で、馬鹿に長い、エタノールの知れぬ青菜のやうなものが、杓子に引つ懸つて来る。一たい之れは何だと云へば、S君空嘯そらうそいて何でもいゝからサツサと喰へと云ふ。試に之れを口にすれば妙な香、妙な齒ざはりで、何とも云へたものでない。S君の外は誰れも之れを食ふものなく、生味噌などでやうく朝飯を濟ました。



\* \* \* \* \*

(二) 食卓雑事及食費

話が食物に移つたので、こゝで少しく食事に関する事柄を述べ  
てみる。六年の長い月日の間なので、勿論時々かはりはしたが  
脚氣かっけいによいと云ふのと、一ツは經濟だと云ふので、引割麥三分米  
七分のカテ飯を、尤も長い間食つたやうに覺えて居る。おかげ  
は、朝は味噌汁、(香の物はあつたり無かつたり、晝は朝の汁の残物  
又は生味噌ときまつて居る。之れは在庵者は皆學生で、晝の仕  
度をする隙がないので止むを得ざるに出でたのである。晩は  
定額(一日三四錢位)の範圍内で、ドンナ物を喰はしてもよいとい



\* \* \* \* \*  
ふことになつて居つた。時として當番大に腕を振つて、一同を  
アット云はせるやうな洒落た御馳走や、珍無類の料理を喰はせ  
ることもあるが、横着の當番になると、一丁の生豆腐に醬油をか  
けて喰はせることも、珍らしくはなかつた。

\* \* \* \* \*  
食卓上で屢々議論の種となつた問題は、飯の硬軟事件であつた。  
飯に湯をかけて粒々相離るゝを標準とすべしと論ずる硬派、お  
はぎの様に米粒の形を存せざるを上乘なるものとすと主張す  
る軟派、互に鍋をけづり、皿を敲き、口角泡を飛ばして、或は衛生上  
より、或は經濟上より、或は美學上より、若しくは風味上より、果て  
は人格上にまで論及し、終には鐵拳を飛ばし、庵の平和を破るこ

\* \* \* \* \*  
と夥しいので、一同協議の後、法三章の臺所憲法を制定した。曰  
く

第一條 食事合圖の拍子木打つまでは、臺所へ入るべからず。

第二條 飯の硬軟、お菜の好惡、及お菜の分配等に就ては、一切  
苦情を述べざるを許さず。

第三條 臺所に於ては他人を不快ならしむる言語舉動を嚴  
禁す。

\* \* \* \* \*  
當時は米一石五圓位の時節で、總ての物價、今日に比ぶれば半値  
位であつたので、敢て甚しく口をつめたといふではなけれど、一  
ヶ月食費は二圓五十錢位で、或る月の如きは一圓八十錢にあが



\* \* \* \* \*  
つたこともあつた。權兵衛の如きは一ヶ月の學費金五圓で、固より贅澤は出來ないが、時々催さるゝコムパニ一の費用位には敢て不足を告げるほどではなかつた。今日のやうに多額の學費を要するやうな次第では、權兵衛の如きは蓋し今頃腰辨か、若しくは小學校の先生になつて居る位が關の山であつたと思ふ。實に、仕合せしあはせの時に生れたものだと思ふ毎に、感謝の念が眞に胸中に溢るゝを禁ずることが出來ぬ。獨り權兵衛のみでない、在庵仲間の多くは、權兵衛と負けず劣らぬ貧書生であつたやうに思ふに就けても、定めし、權兵衛と感を同ふせられて居ることゝ信ずる。

(三) 餅米の飯

\* \* \* \* \*  
螢雪庵では月拂つきはらひで、米贈を森田と云ふ近所の小店みせより取つて居たが、此森田の婆さんがなか／＼一筋繩でいかぬ女傑で、我等は窃かに安達が原なる尊號を奉つて居つた、暫しにても拂滞ふるが如きことあれば、寸毫の假借なく督責甚だ急で之れには一同頗る恐縮し、いろ／＼外交手段を弄しても見たが、到底我等青二才共の手におへる譯のものでない。百の哀願千の愁訴も一切お聞き入れがないとあつて、或る時終に米贈供給の途を斷たれてしまつた。サ一事だ。庵の興廢此の一舉にあり矣といふの



\* \* \* \* \*  
で、早速瑩雪庵大會を催したが、無い智慧は三人以上寄るも矢張無いもので、一向よい考は浮ばぬ。時に今の樺太の技師なるT君、突然膝を叩いて妙計ありと叫ぶ。何かと聞けば一同の所持する小遣錢を掻き集めて餅米もちこめを買ふべしと云ふ。如何にも餅米なれば五升八升の小買も耻づるに足らぬ、實行々々といふので當番先生策を持つて駈け出した。元來飯の焚方に就ては、世間幾百の下女諸裙に決してヒケを取らぬ當番先生も、餅米飯は始めてい加減がわからぬ。出來たものは薄糊同様の粥であつた。然し一同空腹なので甘いうまいと盛に嚙かり込み、幸にも露命を繋ぐを得た。

\* \* \* \* \*  
餅米の飯を食ふたは此時だけではない。或十二月の月始め、歳末の餅の料にと、餅米一俵を奮發し仕舞ひ込んで置いた。處が月の半ばに肝心の飯米が缺乏を告ぐるに至つたので、止むを得ず、仕舞置きたる餅米に手を付け、愈餅を舂ぶふといふ頃には残り少くなになつたといふ始末。前回に餅米飯を喰ふた時は一二日の事で左程とも思はなかつたが、此度數日之れを繼續するに及んでは、其濃厚なる香を嗅ぐばかりで、モ一胸が一杯になるやうな次第で、一種の諷刺教訓に預かるやうな氣持がした。



(三) 小豆飯

我等草莽の微臣だも、尙ほ且つ鼓腹の樂を恣まゝにすることを  
得るは一に 天皇陛下の御懿徳に據る。今日の佳辰豈祝せざ  
るべけんやと云ふので、或る年の天長節に小豆飯を炊いて、祝意  
を表すことにした處が小豆飯をたいた經驗は誰れにもない  
ので、その日の當番、今の鐵道技師〇君は、小豆を米に混ぜて其儘  
炊いた、出来たといふので食ふてみると、飯中の小豆は小石の如  
くで到底食はれたものでない。止むを得ず、飯だけを吞込み、小  
豆は口より逆戻り、面白半分（さやう）にプウ〜と邊り嫌（あ）らはず吹き散

らす。中には〇君の頭めがけて吹き付ける惡戯者（いたづらもの）もある。イ  
ヤハヤ飛んだ天長節祝賀會であつた。今も時々〇君は此時の  
感想を述べて、アノ時のやうに腹のたつたことはなかつたと云  
ふて居らるゝ。

紫々白兔 東去西顧  
衣不如新 人不如故

(寶主妻)



\* \* \* \* \*

(四) 馬鈴薯常食實施案

今の某縣農事試驗場長O君在庵當時はS君と云て居つた、或日の晚餐席上に、馬鈴薯常食實施案を提出し其日ブリガム先生のレクチュアアで、聞きたてのはやゝなる馬鈴薯效能論を演説して曰く、抑も馬鈴薯は今より何百何十年前とかに、南亞米利加に發見せられ云々より説き起し、古今に涉り、東西に通じて、故事來歴、効用、栽培、反別、産額、氣候、土質、栽培法等に及び、而して勵聲一番卓を叩いて『苟も我國をして世界列強の一たらしめんと欲せば列強諸國に倣ふて速に馬鈴薯常食を斷行せざるべからず』

\* \* \* \* \*

と結論した。我等一同ヒドク此名説に感服し、本庵に於て率先實施、以て範を國民に垂るゝことゝした。時恰も馬鈴薯收穫時期なので、O君自ら進んで實行委員長となり、農學校農園へ交渉し、差し當り二十俵許り拂下を受け、農園の手車を借りて、一同汗<sup>あせ</sup>水<sup>みづ</sup>たらして庵中へ運び、翌日より三度三度、之れを<sup>く</sup>漉<sup>こ</sup>で、鹽を振り掛け食ひ出した。初日はマゝ無事であつたが、二日目になると權兵衛の腹工合變になり出し、トテモ堪へられそうにもないので、密かに知人を訪ねて飯にありついた。三日目になると、委員長なるO君先づ弱音を吹き出して曰く、學説は學説として此馬鈴薯常食たる、吾人二三日來の經驗によりて之を徴すれば到



底我國民の堪へ得る所にあらざるを知る。既に堪へ得ざるこ  
と明なる以上は、籠を示すも徒勞に屬する譯である。依て當分  
中止しては如何んと、一同拍手して之れに和し、漸く此厄難を免  
るゝを得た。實は此時だけは、サスガの辛棒強き權兵衛も内々  
庵を退去する準備をして居つた。之れに鑑みて、へたな學說で  
人を困らすことなきやう、世の學者達に希望して置く。

親朋形影燈前月

家國音書笛裏風

（英梅村）

(五) 正月の餅

一と歳正月の餅より二大活劇を演じたことがあつた。其の一  
は元旦早朝、雇員一同一張羅の羽織などを着込で食卓に就き、諸  
君お互にお芽出度う、大に雑煮を祝はふと始むる間もなく、今の  
某會社の技師なる五君、突然顔を眞赤にしてウ、と唸り  
出す。ドウシタ〜と問へど答へぬもことほりや、餅を咽に引  
懸けたのだ。見る〜顔は紫色になり、眼を白黒にして苦み出  
した。サ、大變だ。早く誰か醫者へ駈ける。大根オロシを拵  
へる。脊を叩け。ソラ餅鍋がヒツクリ返る。茶碗が躍り出す



ぞと云ふ騒ぎ。

其二は庵員の某君が餅を喰ひに來いと、其同級生に觸れ廻つたとやらで、平生來たこともない先生等までがドシ／＼やつて來る。之れが一部庵員の不平を招き、終に残りの餅を各員平等に分配することゝした。處がN君(晝寝好きの)の餅が其留守の間に少々滅つたとかで、同室のO君(馬鈴薯常食委員長)に嫌疑をかけ、色々と否味を云ふ。O君承知しない。終に大喧嘩となり。奮撃格闘頗る人意を壯にするものがあつた。權兵衛今こそ温厚篤實然として濟しては居るが、元來其心身の組織上、頗る蠻素成分に富んで居ると見え、喧嘩は菓子に次いで大好きであつた。

意見の合はぬ時など、口先きでグズ／＼争ふて居るやうな、手ぬるいことは大嫌で、何でも是非を干戈に訴へ、一舉以て事を決すと云ふ、武斷派の男なので、新年早々の此壯快なる活劇は、頗る權兵衛の意を得たものであつた。

琪樹西風枕簟秋

楚雲湘水憶同遊

高歌一曲掩明鏡

昨日少年今白頭

(評 運)



(六) 喧嘩

喧嘩は士氣を鼓舞し、心身の活力を増進する手段として、瑩雪庵に於て敢て奨勵したといふでもなかつたが、之れを禁止するが如き不心得の人間は我等同志の中に一人もなかつたことを權兵衛茲に特筆大書するの光榮を有する次第である。一たい庵中に於ては『喧嘩を仲裁し、若しくは之に手出しすべからず。但し口先きで加勢するは此限にあらず』と云ふ一不文律が、冥々の間に行はれて居つた。之れ往々仲裁を装ふて、喧嘩に飛び込み、ドサクサ混れに、平生己れに快からざるものに拳固を喰は

して、素知らぬ顔するが如き卑怯の舉動及び暗々裏に、己の好むものに與し、其者の利を圖るが如き偏頗なる行爲を、絶対に禁止せんとの精神に出でたものだ。故にソレ喧嘩が始つたとなると、何處だ、誰れだと、庵員擧つて駈付け、或る者は立ち、或る者は蹠して之れを觀、會心の所爲は、拍手喝采して之を褒め、翠丸を握るが如き卑怯の仕業は、口を極めて之れを罵り、以て群雄環視の裏に、遺憾なく其力を展べしむるを力めた。時としては激闘三四十分の長きに及ぶも勝敗決せぬので、日課の下た調べ未だ終へざる者は、書籍を持つて更めて出直し、書を読みながら喧嘩を見物するといふ有様であつた。而して闘ふ者兩者共に身綿の如



く疲れ、怒氣又た自ら散ずるに至れば『オイモー止めやう』『ウ  
ン止めやう』とて、茲に始めて活劇の幕を閉づるのである。  
螢雪庵に於ける健闘者は蓋しN君(晝寝好きの)を推して第一と  
すべしである。君と同時代の庵員で君と闘はざるものは一人  
も無かつた。名實相稱のS君(君名を和と云ふ)すら、尙ほ君と闘  
はざるを得ざるに至つたことがある。而して其の尤も多く君  
と喧嘩の相手たりし者は、M君(大學教授)、I君(樺太應技師)及權兵  
衛の三人であつた。君敢て膂力衆に秀づといふではなかつた  
が、其拳の早きこと實に此の權兵衛以上で、少しにても意に満た  
ぬ事あれば、先づ拳を飛ばして而して後言ふ流儀で、口より先き

に生れたといふ人は、世上敢て乏しとせぬが、手より先きに生れ  
た人は、日本廣しと雖も、蓋しN君ぐらゐのものだらうと我等は  
常々思ふて居つた。聞けば、同君は昔日の意氣今尙ほ毫も衰へ  
ず、盛に其妻君と部下とに鐵拳を喰はしつゝありと。

津の國のなにはの春は夢なれや

蘆のかれはに風わたるなり

【西行】



(七) 食堂突貫

三度の食事が待ち兼ねらるゝ食ひ盛りの時代であると、モトモト汁の實又は多少でもお菜の豊富なるものにアリ付かんと食事合圖の拍子木鳴るや否や、庶員一同喊聲を擧げて、我先きに食堂へ突貫するが例であつた。然しドー考へてみても、苟も高等教育を受けつゝある身で、食堂突貫で行人を驚すが如きは、全く褒めた話とは思はるので、何とか之れを止めやうと、幾度も種々の方法手段を目論んだが、一として成功したことはなかつた。夫れも其筈、我等もし千代萩の千松然と、腹が減つてもひも

じうないなど、瘦我慢をして居らうものなら、いつも實なし汁と魚の尻ツボとを當てがわれるので我慢がしきれぬ。依つて按ずるに、當番たるものが、最後に自分の汁を盛り、皆の選り残りのお菜を取る事とせば、自然に汁の實は豊富となり、お菜の分配に厚薄なきに至らんとて、早速之れを實行し、一同先づ安心と油斷して居ると、何ぞ計らん、拍子木を打つ前に既に充分に毒味し、口を拭ふて素知らぬ顔して残り物に満足して居るやうな偽善的横着當番あるを發見し、つくづく思ふた。法愈完ふして監獄愈繁昌すると同様に、法だの、手段だのといふものは眞に頼むに足らぬ。人間共同生活の眞髓は徳義の外には無いと。今や權



兵衛、農村發展策として農事改良を實行せよ、手間を遊ばさぬやうに盛に副業をやれ、共同一致して事業を勵め、個人の貯蓄と共に町村基本財産の蓄積を圖れ、但し此等は抑も未だ、其根本は農村の風紀及び人心の振肅にあるのだなど、喋り廻つて居るが、抑も此思想たる、二十年前に、螢雪庵食堂突貫に胚胎したものだ。

翻手作雲覆手雨

紛々輕薄何須數

君不見管鮑貧時交

此道今人棄如土

(杜甫)

(六) 汝の額に汗して汝の糧を喰らへ

朝の當番飯鍋一杯に飯をたいて置いて置いても、何分にも晝飯には、不足勝で、學校より先きに歸つた連中がタラフク食ふと、屹度二三人食ひ逸りの者が出來て生豆腐などで一時の凌を付けなくてはならんやうな次第となる。元來生豆腐の晝飯代用は、誰れも餘り感服せんので、我こそは此食ひはぐりの厄を免れんと、十餘名の庵員は晝の放課後、全速力を以て庵へ駆け付ける。始めの間は沿道の人々は何事が起つたのか、火事か、喧嘩かなど、往來へ飛び出して見るやうなこともあつた。



伏して惟みるに、天地の創め、全智全能の神様は汝の額に汗して  
汝の糧を食らへと、アダムに仰せられたとのこと。而して何萬  
代の後だかは知らぬが、兎に角、アダムの子孫たる我等のことな  
れば、晝飯にあり付かんとて汗水垂らすに不思議はないが、實は  
頗る苦しい。學校螢雪庵間十町餘りの處を精切つて駈け付く  
るので、各々自分の茶碗に推し付け、山盛一杯に飯を盛つた  
後、暫くは先づ安心と息をつかなくてはとて、飯が咽を通らぬ  
やうな始末で、如何に稼がなくては口を糊することが出来ない  
セナ辛き世の中にせよ、せめて駈けなくても飯の食へる良法は  
あるまいかと、仲間の先輩に聞いてもみたが、働かずには食はふな

ど、ソナ不心得のことがあるものかと云はれてみれば、夫れ  
もそうだと、權兵衛も毎日驥尾に付して駈けて居た。

帆影去悠々

停機宿波頭

亂烟迷野岸

獨鳥出中流

蓬夢延鄉夢

江風阻暮秋

儻無身外事

甘向扁舟老

(杜牧)

つ



(一九) 金比羅様のおそなへ

中央寺に立派な金比羅堂があつた。願事は何でも御聞き届け  
くださるといふので、家内安全、無病息災の御祈は勿論、金を授け  
たまへ、我戀叶はせたまへと、善男善女の參詣引きも切らぬ。但  
し金比羅様も重大事件になると、只では御聞き入れがないと見  
え、願人はおそなへを上げるが例であつた。

我等つらく考ふるに、金比羅様は餅をおあがりなさるにあら  
ず。唯だ之れを上げるもの、誠心を善哉善哉と嘉納したまう  
のであつてみれば、お目觸にも、長く之れを佛前に備へ置く必要

なく、且つ之れを我等が頂戴するも、將た寺の坊主が持ち行くも、  
其間に何等の差違がないと考へた。そこで時々偵察を放ち、吉  
報に接すれば、ザン拳で委員を定めてお受し來らしめ、一同寄  
つて之れを食ひ、以て金比羅大権現の廣大無邊の功德が我等貧  
書生にまで及ぶを感謝して居つた。處が俗人や坊主共は金比  
羅様の御精神を解する事が出來ず、願人は未だ満願にならない  
内におそなへを下げてくださいは困ると坊主へ交渉し、坊主は又  
蝨雪庵の書生に相違ないなど、早速やつて來て、餅が食ひたけ  
れば別にやるから、金比羅様のお供に手を付けて下さるな、と  
、餘計な干渉をする。權兵衛等對金比羅事件に、坊主などの容



啄を許さぬと、怒鳴つて遣ふかとも思つたが、何彼につけ、一方ならぬ恩を受けて居る坊サンのことなれば、虫を殺しておとなしくハイ／＼と云ふて居つた。但し固とより之を守るべき義務あるなどは毛頭思はないので、其後も不相變之れを續行した。今から考へてみると、此一小事件も、廢庵の引導を渡された、少くも一原因となつたやうに思ふ。早く止めればよかつた。

こしかたはみなおもかげにうかひ來ぬ

行すゑてらせ秋の夜の月

定家

(三) 佛前の菓子

世の中に没義道の事は多けれども、佛前の菓子ほど譯の分らぬものはないと思ふて居る。一旦供へた菓子は乾枯びやうと芥だらけにならうと、坊主共は一向頓着したものでない。お釋迦様如何にお菓子好きであらせらりやうとも、定めてウンザリなさると思ふ、一たい前にも云つた通り、佛様は我等賤しい人間共のやうに、ムシヤ／＼おわがりなさるではなくて、唯だ其心をお汲み取り下さるだけであつてみれば、如何にも感覺遲鈍であらせらるよと云はぬ許りに、同一物を斯く長々と突き付けて置



\* \* \* \* \*  
くなどいふ事は、お釋迦様を馬鹿にした次第で、不敬の至りと  
信ずる。權兵衛は元來三度の飯を二度に減らしても菓子を食べ  
ひたい方ではあるが、然し同一物而かも乾枯びた芥だらけのも  
のを、毎日持つて来るやうな無禮の事をすれば、坊主頭を殴り飛  
ばさすには居らぬ。お釋迦様は忍辱を旨とせらるゝ、大慈大悲  
のお方であればこそ、坊主頭に瘤も出来かさずに居る次第と思  
ふ。坊主或は云はん。佛前に菓子を供ふるは、お釋迦様におあ  
がりなさいと云ふのでなく、唯だ見場美げに、飾り立つるに過ぎ  
るのであると、果して然らば、愈々以て不都合の次第である。試  
に思へ。我等の目の前に、うまそうな菓子を持つて来て、之はお

\* \* \* \* \*  
あがり下さいと申すのではありません、見場に出したのであり  
ますと云は、勸忍なるべきか。一たいお上には、色慾を挑撥す  
る様な言論、文書及舉動を八ヶ間しく取締らるゝに、食慾を挑  
するやうな言論等を捨て置かるゝは、ドーモ片手落の御仕打で  
はあるまいかと思ふ。食慾を挑衝する言論等が、無垢の青年を  
害ひ不測の災を醸すことあるは、決して珍らしとせぬ。又たか  
の寺詣りに、母に抱かれて来る無邪氣のボツチャン達が、佛前の  
菓子を頻りに欲しがるを目撃する毎に、眞に罪な事だと、義憤を  
發せざるを得なかつた。坊主或は又云はん。然らば菓子屋の  
店頭に菓子を飾り置くも、矢張り不都合にあらすやと、ア、何ぞ



夫れ然らん。菓子屋にあるものは人の欲する儘に、値を拂ふて味ふを得。所謂高根の花ではない。假りに一步を譲り、食慾を桃銜する罪相等しとするも、一は我利我利亡者の商人のことなれば、慈悲を旨とするお寺と同一に論ずべきものでない。權兵衛等は此見地より屢々佛前の菓子を引き下げて佛様に敬意を表すると同時に、人道の爲め聊か盡して居つた。引き下げた菓子は勤勞に對する正當の報酬として、之れを頂戴したは勿論である。然るに坊主共は己れの懶惰を棚に上げ、此の人道的義舉に妨害を試み、我等が寺へ行けば、夫れとなく小僧をして我等を監視せしめて、我等をして終に此の義舉を斷念するの餘儀

なきに至らしめた。眞に濟度し難き、無教育の坊主共であつた。

人は時々刻々に死しつゝあり。昨、我は昨既に死し。今我は今將に死せんとす。死する前に何事をか爲せ。事を爲すの難きは難しと思ふより生ず。何事をも思はず唯瞑目突進せよ。早く苦痛に入るは早く苦痛を出るなり。

（黒岩涙香）



(三) 西洋梨の實驗

札幌農學校創立以來、引續いて毎月一回づゝ開かれて來た開識社の演說會に、或日庵中の有志五六名傍聽にと出懸けた。一辯士西洋梨の栽培を獎むとか云ふ演題で、何だか山鳥の尾の長々とお喋りした後、其香味の絶美なるに論及し、我等をして涎の垂るゝを禁ずる能はざらしめ、而して頗る挑情的口吻で「諸君もし北海道廳裏の勸業試作場に目下當さに成熟せる美果を味はし、我が此言の毫も誇張に失するものにあらざるを知らん」と述べて壇を降つた。我等思らく、斯くまで親切に教へてくれたを

徒らに聞き流しにするは辯士に對する禮でない。且つ我等貧書生に又たと得難き此好機を逸して、終生西洋梨の風味を識らずとありては、學術に不忠の譏りを免がれざるのみならず將來農學士となりたる曉に、或は其肩書を汚す虞なきにしもあらずと考へた。さりとして牆を越え、番人の眼を掠めて、無斷に之れを實驗するが如きは良心の許さざる處、如何にせんかと一時は頗る惑ひしも、苟も學術研究の爲には、萬事を犠牲に供して尙ほ且つ辭せぬとの決心意氣あるにあらざれば到底大學者たるを得ぬと、誰か憤慨して勵ましたので、一同茲に決心の臍を固め、三更の月明りをたよりに勇ましく出陣した。而して一州を取る



も誅せられ、八州を取るも誅せらる、誅は一のみとの格言に遵ひ、各自の負ひ得るだけ慾張つて歸つた。庵員集れ。西洋梨風味の實驗始まるぞと怒鳴れば、研究に忠實なる庵員一同、既に寢て居つたもの迄も飛び起きて、遺憾なく充分に實驗したはよいが、翌日より何れも下痢に罹り、交互に便所へ百度參りをするといふ次第。就中權兵衛は常に人一倍實驗研究に身を委ねるので、此時も其崇を受くる事尤も烈しく頗る苦しんだ。大學者となる又た難哉である。

### (三) 植物界のクロンウエル

權兵衛性甚だ南瓜を愛す。其花に媚ぶるが如き艶色麗容なく、其葉は粗野に、其果は魁偉而かも其味の美なる天下之れに若くもの多からずである。彼既に其二葉の時より超然類を抜き、やゝ長ずるに至れば、正を踏んで恐れざる慨を以て、群小を壓し、垣を越え、樹に攀ぢ、隣りの屋根であらうと、人の屋敷であらうと頓着なく、其行かんと欲する所に邁進す。權兵衛思へらく、植物界のクロンウエルなりと。

世を擧げて虚榮を事とし、輕佻浮華の濁流、滔々として社會に横



\* \* \* \* \*  
溢するの今日、眞摯勇健、クロンウエルの如き偉人を思ふこと切なるに就けても、我等は南瓜を愛せずには居られぬ。而して世には我等と感を同ふし、窃かに南瓜に心を寄せらるゝ婦人令嬢方の少なからざるは、權兵衛の大に意を強ふして居る所だが、一方に於て、愚物を罵るに南瓜野郎を以てし、南瓜を侮辱して憚らざる分らずや共の未だ全く跡を絶つに至らざるは、遺憾に堪へぬ所である。權兵衛他、志を遂げ數畝の地を得ば、前庭後園唯だ南瓜のみを栽ゑやうと思ふて居るが、南瓜に同情を寄すること世の心ある婦人令嬢の如くならざる細君に、反對されねばよいがと今より窃かに心をなやまして居る。

\* \* \* \* \*  
閑話休題として、霜枯<sup>しもがれどき</sup>時の或日曜日、庵員一同圓山に遊んだ歸り道に、心なき農夫共が、人間の當さに師事すべき數十個の南瓜を無残にも路傍の畑中に雨に苦しみ、霜に曝せるまゝ遺却し、恬として顧みぬを見、義を見てせざるは勇なきなり、救はずんばあるべからずと大に義憤を發し、其内の一二個を抱へて庵へ歸り坊主ではないが、寺の門前に棲んで居るお蔭には、引導の渡し方位は、へたな生臭坊主<sup>なまきやう</sup>よりはよく心得て居るので、早速『汝元來屁玉の親、煩惱を解脱して我等の腹中に入り佛果を得よ』と一喝し、腹中へ葬つてやつた。元來我等螢雪庵同志は居常人間の南瓜たるを期して居つたので、頗る盛に南瓜を食ふたが、未だ嘗て



此時のやうな、うまい者を味ふた事がなかつた。陰徳あれば陽報ありだ。

酒醒郷關遠

邊々聽漏終

曙分林影外

春盡雨聲中

鳥倦江村路

華殘野岸風

十年成底事

羸馬厭西東

(李昌符)

(三) 捕虜

寺の門前はいづこも同じ子守の遊び場である。殊に我盛雪庵の附近は鼻垂し小僧や、おてんば娘共の集會所で、夕方からワァー／＼キヤツ／＼と笑ふやら、泣くやら、其騒々しいこと實にたまつたものでなかつた。八ヶ間しいと大喝すれば、悪口を云ひ／＼一時はパツト散り去るも、忽ちに寄り來ること夏の蠅に異ならずである。若し夫れ少しにても笑ひ顔でも見せやうものなら、格子につかまる。窓に上る。障子に穴を明ける。棒を突込むなど始末にいかぬ。我輩一策を案じ、彼等の窓前に近づ



を見濟まし、水を銜み、頭から吹きかけた。鼻垂共も承知しない。翻ふるに小石を以てす。何とも手の付けやうがないので、一夕伏兵を置き、餓鬼大將を捕虜とし、裏の垣根に嚴重に縛り付け、一同入浴にと出懸けた。歸つて見ると大變だ。餓鬼大將の親が來て居る。此の親は巡查上りとかいふので、人を監禁するものは、刑法第三百何十條とかにより懲役になるのだとかで、我等に柿色の着物を着せざれば承知が出來ぬと敦圀く。之れには權兵衛も少なからず驚き、宥むるが上策と色々に云ふてもみだが、餓鬼大將の親だけに頑としてきかぬ。仕方がない。懲役に行かふと權兵衛覺悟をきめた。よし、此やうなことで懲役になつ

た處で、兩親もヒドクは御叱りなさるまい、又た友より見捨てらるゝやうなこともあるまい、善惡共に己の爲した事に對し報を受くるは當然だ。モ一決して誤らぬ。サッサと訴へる所へ訴へると強く出た。此時まで後の方に小さくなつて居つたK君素知らぬ顔して出て來て、『何を訴へるなど、騒いで居るのか』と、ぼける、『貴様等は我子を縛つたじやないか』『そんな事は知らぬ』『イヤ縛つた』『縛らぬ』と水掛論が始まつた。其内に薄暗がりやを幸に推すなく、前から横から此巡查上りの先生に打當る。中には拳固を固めて横腹を厭と云ふ程突き付けるものもある。怒るの怒らぬの騒ぎでない、烈火のやうにな



りて、覺えて居れとか何とか凄味を云ひく、子供を引張つて行く。我等勝賊舉げて之れを送る。今に巡査が来るだらうと二日許りは心待ちに待つて居つたが、とうく來ない。柿色着物を着損つた。

心あてに見し白雲はふもとにて

おもはぬ空にはるゝ富士の根

(二) 小便の一齊射撃

螢雪庵の屋根は一種の音樂堂であつた。夏の蒸し暑い夜などには一同、屋根へ上り、涼みながら尺八を吹く。明笛又は笛を奏する。詩吟唱歌は云ふに及ばぬ。無藝の先生等は『廻れ右前へ』など、號令をやる。耶穌信者は聲高々と讚美歌を歌ふ。近所の腕白共は口ハで寄席へでも行つた氣で、盛に傍聴にとやつて來る。固より公德の何たるを解せぬ奴等のことだから、冷かすやら、褒るやら、罵るやら、笑ふやらで、我等の妙音美聲も、訓練なき彼等の耳に入らぬ。『オイ小便の一齊射撃で退治しやう』





\* \* \* \* \*

やないか』と誰れか云ひ出す。中には『アイニク小便の持合せがない』など云ふものもあつたが、二三人よし來たと云ふので、ワン、ツ、スリーで發射した。處が生憎にも筋向ひの安田何子とやら云ふ十歳許りの可愛らしい娘にヒドク掛つたとかで、泣々内へ歸る。これはしまつた、あんなやさしい娘にかけは濟まぬと、S君と權兵衛とで十錢ばかりの駄菓子袋を下げて誤りに行つた。恰もよし、安田の爺さん一杯さこし召し懸る上機嫌の處で、『ナニ誤りに來た、そんな弱い事でドウする、此親爺の若い時などは村の鎮守の森で、往來の人に小便を引掛けて遊んだものだ。今時の若い者はおとなし過る。後學の爲めチ



\* \* \* \* \*

ツト昔の話でも聞かして上あるから時々遊びにおいで』と云ふ  
大氣焔であつた。爾來此爺さん頗る權兵衛の氣に入つた。い  
つか一度は菓子あの御馳走になりながら話を聞きに行ふと思ふ  
て居つたが終に果さなかつた。今も尙ほ此お爺さん達者で居  
るだらうか、小便掛けた娘は今頃は立派なおつかさんになつて  
居るだらうなど、思へばなつかしさに堪へぬ。

よの中は何かつねなるあすか川

きのふの淵は今日の瀬となる



\* \* \* \* \*

ット昔の話でも聞かして上あがるから時々遊びにおいで』と云ふ  
大氣焔であつた。爾來此爺さん頗る權兵衛の氣に入つた。い  
つか一度は菓子あまの御馳走になりながら、話を聞きに行ふと思ふ  
て居つたが終に果さなかつた。今も尙ほ此お爺さん達者で居  
るだらうか、小便掛けた娘は今頃は立派なおつかさんになつて  
居るだらうなど、思へばなつかしさに堪へぬ。

よの中は何かつねなるあすか川

きのふの淵は今日の瀬となる



(二五) 武士のなさけ

序にもう一つ小便のしくじり話をする。然し之れは權兵衛でないことを断はつて置く。誰れであつたか忘れたが、或夜暗がりや幸に、まちなかに「ジャク」と發射して居ると、オイコラ、オイコラと尻を叩くものがある。見ると查公だ。オイコラと頻りに尻を叩く。ハイハイと返事しながらも中止は出来ぬ。オイコラ、ハイハイ、オイコラ、ハイハイで漸くのことと仕終つた。查公は鬚をひねりて、『けしからんではないか、君は市街に小便をすることは相成らんといふことを知らんのか』『ハイ』『ハイで

はない』『ハイ』名前は何と云ふ、何をして居る』『ハイ誠まことに相濟あはみませんで、ドーア御見逃しを願ふ。武士の情を以て』と云へば、查公は吹き出した。べたと思ひ、『ドーア宜敷く』と逃げ出した。查公敢て追て来ぬ。武士と云はれたが嬉しかつたらしい。

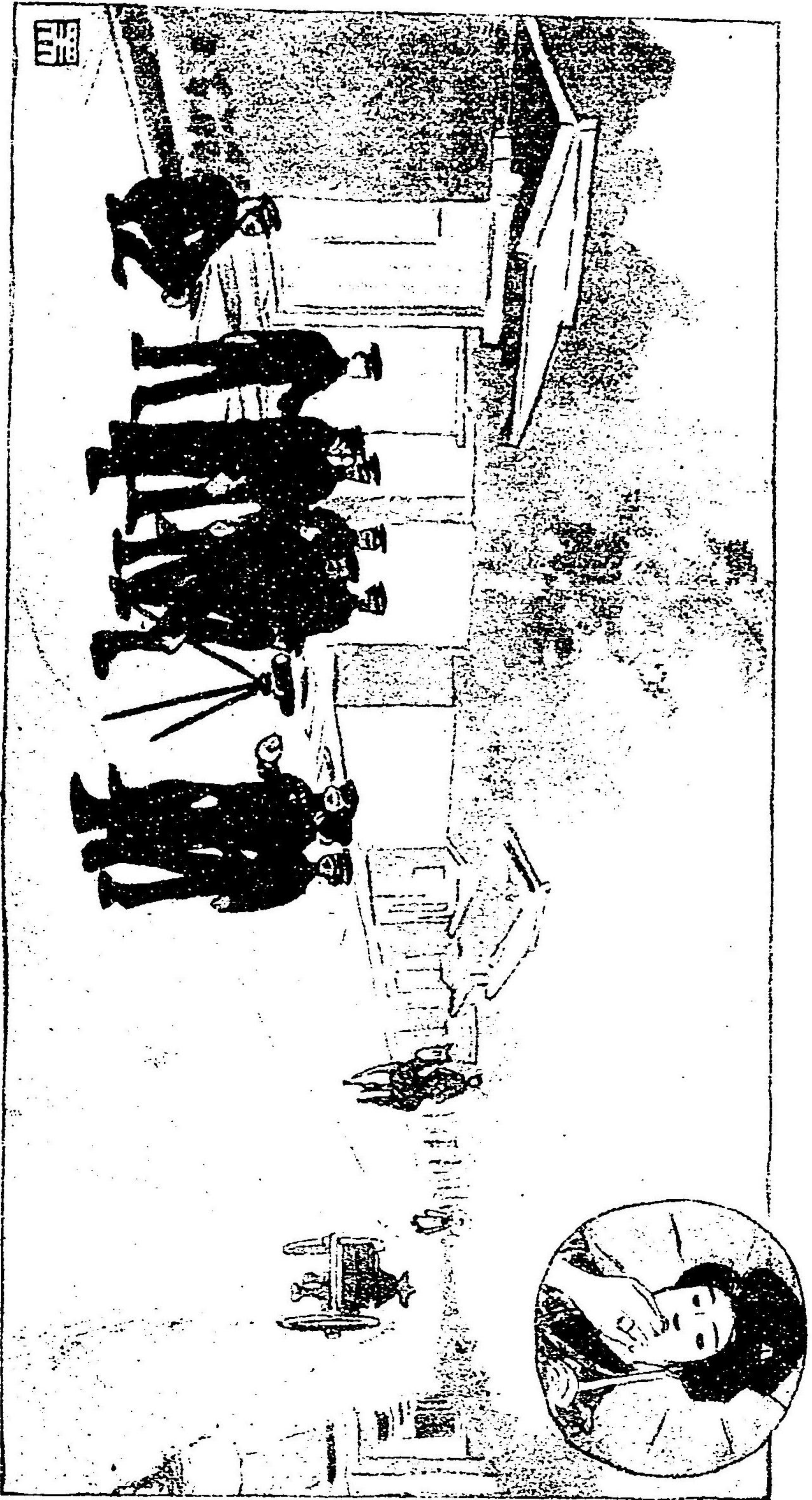
乗り得ても心許すな海士小舟

片瀬の波にうきしづみあり



(二) 測量實習

小便話の序にもう一つの書くところがある。權兵衛等一日〇先生指導の下に、農園附近に測量の實習をして居つた折り、遙か向ふを立派な先生がお通りなさる。試にレベルの眼鏡を向けて見ると當時札幌に時めく某の紳士である。見る間に、此紳士立ち止まり後先き見廻し、これ見よと云はぬ計りに、砲先きを我等眞向に向けて發射し出した。『ヤー之れは壯觀だ、見事なものだ、皆々測量せよ』と、こんな時には公德を重んずる我等、『先様お代り』で、互に譲り合で、且つ幸にも彈藥頗る豊富とみえ、發射長時に涉





\* \* \* \* \*

つたので、一同洩れなく充分に測量を了することを得た。爾來紳士の典型は我なり然と、公會の席上などに濟まして居らるゝ此紳士を見る毎に、窃かに噴飯を禁ずることが出来なんだ。他日仲間の者が、同じく測量實習をやつて居つた時、遙か向ふより妙齡の令嬢しなをつくつてやつて來らるゝ。「ヤー別嬪さんが來た』『どれ〜』と互に眼鏡を奪ひ合ふて覗く。(こんな場合には我等の公德心も少々怪しくなる)中には願作ねがはくばけいらとなつて輕羅らなど云ふ多情多恨の先生もあつたが、見て居る間に、此令嬢あたり見廻し、袂から饅頭取り出し、周章て、之れを頬張る。暫く口をもぐ付かせた後、又あたり見廻し饅頭を頬張る。斯くすること數



次。其様子のをかしさ眞に噴飯の至りて、見るもの一同隨喜の  
涙に咽せんだとの事であつた。  
惟みるに人間の仕業を常に抜目なく御覽になつて居らるゝ神  
様には、二六時中御噴飯つゞけてあらせらるゝことゝ恐察し奉  
る。笑ひ續くも随分苦しいものであるから、のべつに神様を  
噴飯ふまさせ申しては相濟まぬと、此權兵衛などは大に氣を付けて  
居る積りである。

一聲は月に影さすほとゝぎす

(七) I 君の蒲鉾

I 君(中途退學其後の消息を知らぬ)は螢雪庵内唯一の大金持で、  
毎日、毎日、自分の好めるものを買ふては之れ見よがしに獨で食  
ふて居る。我等羨敷くもあり面憎くもあつた。同君或日出入  
りの魚屋より板付大蒲鉾を買ふて、例の如く獨でよろしくやつ  
て居るので、一同推しかけ分配を迫り、場合によりては腕力にも  
訴へさうであつたので I 君豫防策として蒲鉾にトツくと唾  
をひつかける。何に唾ぐらいは洗へば何でもないとして、一向き  
ゝめが無なさうなので、今度はイキナリ前をまくり、翠丸に蒲鉾



をなすり付け『サ、喰へ』と差出した。一同之れにはあきれ返り、匆々に退散した、後にI君殊更大聲にうまい〜と食ふて居る。

今から考へれば、牛や豚の羶丸が文明國の貴女紳士の食膳にものぼせられて居る今日、蒲鉾を人間の羶丸になすり付けたぐらいのことで、之れを食ふことが出来ぬとは誠に非文明の至りであつたと思ふ。人間の羶丸が、豚や牛の羶丸より穢いとは思はれぬのに。

(六) 消極的節儉の餘弊

權兵衛或日同志二三人と共に學友M君を其下宿の樓上に訪ひ、火鉢を圍んで盛に氣焔を吐き合ふこと數刻、やがて議論も菓子も共に盡き果てたので、Iザ御歸庵と座を立てば、コハ如何に、コハソモ如何に、隣家の屋根より盛に煙を吹き出して居る。サア大變だ、火事だ、火事だといきなり隣家へ飛び込んで『おまへの内は火事だよ』と云ふ。隣家の者共『へい何處が火事ですか』と、ぼけて居る。『おまへの内だよ、おまへの内の屋根が燃て居るのだよ』と云はれたので、亭主蹠足で表へ飛び出して見れば



成る程屋根は燃えて居る。内へ這入つて見れば何事も無い。不思議不思議と兎に角急ぎ屋根へ上りて消し留め、幸に大事に至らずして済んだが、済まぬは火事の原因だ。一たい、下宿屋のおかみが悪いのだ。當時未だ下りもせぬ戌申詔書の御趣旨を誤解したわけでもあるまいが、何にしる無暗と消極的節儉主義を奉體し、やす炭を下宿人にあてがふので煙くてたまらぬ。煙嫌ひの權兵衛燻る炭片二三個を火鉢より摘み出し、窓より外へと投げ出した。時は春の始めで家々の屋根にはまだ多少の堆雪が残り居る時節なので、大事あるまいと安心して居つたが抑も騒ぎの原因となつた次第だ。コゝ早く感付けば、こんなに騒

ぐではなかつたものと後悔したが跡の祭で、隣家よりは手ひどき談判を持ちかけられ、下宿屋のおかみからも散々脂を搾られ、おまけに多少の修復料を取られ、『計らざりき、消極的節儉の餘弊爰に至らんとは』一同長歎した。

斷續賓鴻聲轉酸

北邊霜早已催寒

可憐今夜團々月

數口一家三處看

(鷺津殺堂)



(元) さうどう宗

或る晩庵員一同寺へ來れとの御ふれが來た。「難有い、御馳走だぞ」といそ／＼行つた。處が變だ。坊主共は何れも不景氣面をしてろく／＼挨拶もせぬ。やがて、執事の何とか云ふ坊さんが出て來て、禪僧の問答然とイヤに聲色を勵まし「おまへ方は此寺を何と心得て居る」と藪から棒の難問だ。まさか「死人に引導を渡す所」とも云ひ兼ねてもじ／＼して居ると、重ねて「さうどう宗とは何んの事だ」と問ふ。權兵衛等固とより此寺の坊さん方を、古今の名僧智識とは思つて居らぬが、さりとて御

釋迦様の御蔭を以て飯を食ふて居る身で、我々俗人に曹洞宗とは何の事だと教を乞はねばならぬ程、情ない無學の坊さん達とも思はぬので、「一たいどうした譯ですか」と尋ねたら、「とぼけてはいけぬ、此張紙はおまへさん方が書いたのだらう」と、奉書紙に『騒動宗』の三字を見毎に大書したものを見せた。全く覺えがない、且つ耻かしながら此やうな達筆家は我等仲間に一人もない。聞けば寺の門にぶら下つて居る『曹洞宗何とか山中央寺』なる大看板の曹洞宗なる文字の上に、誰れだか御苦勞にも張紙したのだとの事。當時曹洞宗は内曲揉で盛に新聞に歌はれて居つた時節なので、うまく云つたものだと思服は



したが然し事實我等の仕事ではない。元來我等は嘗て俯仰天地に愧づるやうな惡戯をした覺えはない。坊さんに代つて佛様の御菓子を引き下げたり、金比羅さんのおそなへを頂戴したりなどは勿論度々やるが、之れ皆正當の理由ありて然るので、之れを夫の看板に惡戯して、寺に迷惑をかけるやうな不都合の所爲と、決して同一に視るべきものでない。不幸にして我等の行爲中、往々世の所謂惡戯者の所爲と揆を同ふするものあるが爲め、皮想觀察家の誤解を來たした事も少くないが、其行爲の動機に至りては實に月籠雷ならざる相違があるのだ。且つ我等は我等の行爲に對しては、常に飽迄責を負ふ覺悟を持つて居る。

摘み喰して口を拭ひ、素知らぬ顔するが如き淺ましき行爲は頼まれても出來ぬと、辯解大に力めたが、此辯解は兎も角も、張紙の字が我等風情の手になるやうな、まづいものでないといふことに坊さんも氣付いた様子で、先づは無罪放免の宣告を受けたが、豫期してゐた御馳走になり損ふた上に、つまらぬ『さうどう』でむだ暇つぶし、不平だら／＼庵へ引き上げた。

さかでたいあらまじものを今日の日も

初瀬の寺の入相のかね



(三) 腕肉の歎

強いものには御無理御尤も、弱いものには無暗と威張り散らす  
が、當世で、而かも官海游泳の秘訣だと聞いて居つたが、螢雪庵に  
は強いものにはたてをつき、弱い者には加勢する、喧嘩なら持つ  
て来いといふ、官吏としては出来損ひのつむじ曲り共が、よくも  
かう揃つたものだ、と、ほとく感心するの外はなかつた。此根  
性骨こころほねが取れない以上、官員さんになつて居れるものでないと、先  
輩より忠告に預つた事もあつたが、『扱て無理な意見、たましひ  
入れかへろ』と狂句にもある通り、生れ付きの根性骨がなかな

か以て、ちよつとやそつとで取つて除けらるゝものでない。然  
るに不思議にも、権兵衛俸給に衣食すること茲に十餘年。つら  
つら考ふるに如何に自惚うぶ強くも、自らは木を擇んで棲むなど、  
いふ氣のきいた禽あひだとは思はれぬので、犬も歩けば棒に當ると同  
様、之れ全く偶然にも善い木にふつかつたお蔭と思はざるを得  
ぬ。仕合せの至りである。

在庵中にも此根性骨の爲め、失敗したことは少くない。或日近  
所の大工の娘が、其負ふて居る子をひどく虐いぢるので、権兵衛たま  
り兼ね、厭いやと云ふほど拳固こぶを喰はした。娘は泣き出す。嗅は飛  
んで来る。大談判が始まつた。『子供は親の私有物でなく、社會



の一員である以上、子供をいぢめる者に制裁を加ふるは、同じく  
社會の一員たる我等の義務であり、又た權利である』と權兵衛  
固く執つて動かなかつたが、こんな議論が大工の鼻風情の耳に  
入る筈なく、飽迄餘計なお世話だと主張して下らぬ。漸く近所  
の鼻共の仲裁で、爾今決してどこの子供もなぐらぬと云ふ條件  
で、めでたく平和條約を締結したが、權兵衛に取りては唯一の武  
器たる拳固を封じられたので、脾肉でなく腕肉の歎に堪へな  
かつた。

草の葉のほと／＼にをけ露の玉

重きは落る人の世の中

### (三) 夜廻番

一と頃札幌に火付け大はやりの時があつた。昨夕も何町につ  
けられた。今夜も此處にボヤがあつたといふ騒ぎ。甚しきは  
一夜に五六度も、市内に小火事が起つたとかで、何れの町内にも  
臨時に夜廻番が設けられた。折しも夏期休業中なので、我等も  
面白半分に夜廻番に出た。而かも一時間毎に廻る定めであつ  
たが、退屈と眠むいとで、のべつ慕なしに廻り歩いた。處で考へ  
た。抑も此夜廻番の役目たる、放火者に妨害を加へ、彼等をして  
思ふ存分其仕事をなし得ざらしめ、且つ萬一彼等が火を付けて



も大事に至らぬ前に之れを見付けて火事だ火事だと怒鳴るにあり。果して然らば、いま夜廻番が行くぞと云はぬばかりに提灯をとぼし、拍子木を叩き、金棒を引ずりなどして歩くは、ノンセンスの至りである。我等はこんな愚を學ぶべきでない。須く密行して放火者が人なきに心許して仕事をなさんとする所を見付け、アツよくば之れを引き捕へ、以て禍の根を断たんと相談し、就ては多少の危険を覺悟せねばならぬと刀あるものは刀を、なきものは棒切れを寶刀然と腰間に挟んで出懸けた。次第に夜もふけ、三更の頃となれば萬籟寂として唯僅かに虫聲の唧々たるを聞くのみ、仰で無限の蒼穹より下界を瞰視し、人間の小さな

るをさとれ、と教ふる如き、幾億の星を眺め、思を人生に走らせつゝ、横丁へ入ると物蔭に二人の人間が踞つて居る。火付けではなさそうに思つたが、試に泥棒泥棒と叫べば、二人は驚き、右左に分れて逃げる姿は、一人は確かに女である。之れは罪なことをした。人の戀路の邪魔する奴は、犬に喰はれて死ねばよいとの事だが、我等も死すべき時に死するを厭はぬが、成るべくは犬に喰はれて死度くはない。失敬々々と佗を云ひ、尙ほ暫し歩き廻つて居る間に、ヒョクッリ出逢ふた男は密行巡査と我等は鑑定した。そして此男我等を恠しいものと睨んだ様子だ。之れは面白いぞ、飽迄恠しませてやらうと色々の真似をし、一時間



餘り我等の跡を付けさせた後、モ一よからうと我等は夜廻番屋へ這入つて、戸の隙き間より見て居つたが、惜しいことには夜のことゝて、嗚然たる此男の顔を見得なんだは残念であつた。

秦雲渭樹路三千

回首曾遊蹤杳然

携手探花如此日

聯床觀月記前年

虫聲鳴咽荒原雨

雁影低迷遙浦煙

欲寄相思故人遠

白雲牽夢海南天

〔横山黄木〕

(三) 常山溪遊記

札幌が火付け騒ぎの眞最中、庵員擧つて常山溪に遊ぶことに一決し、且つ日中の旅行は苦しいので、午前零時零分に出發することゝした。當時市中は宛ら、戒嚴令を布かれたやうな状態あさまで、庵から豊平橋までの間に二度誰何されたが、幸に拘留の浮き目にも逢はずして石山を過ぎ、約半里も行つたかと思ふ頃、路傍の草をガサ／＼おし別け眞黒まっくろの者がやつて來るに出逢つた。當時恰も農學校農場の玉蜀黍畑へ熊が出た、或は學生某氏藻岩山に熊に逢ふたなどゝの噂盛な時だけに、疑もなく大熊だと氣早の



先生はあとへと逃げ出すやら樹に登りかけるやら、一時は大騒ぎであつたが、よくよく見れば牛であつたので、先づよかつたと一同胸撫で下し、牛に小石を投げ付け、腹癒せ旁元氣を付けて漸く進んだ。常山溪途上の景を唯だ此處一ヶ所に蒐めたと云ふべき何とか坂を登り詰めた頃夜は全く明け放れたが、此坂上の景色はいつ迄見ても厭きはせぬ、水聲を聞き而かも碧潭を見ざる幾千仞の谷を隔て、近く距天不盈尺の斷崖絶壁に對し颯々たる萬里の天風に顔を拂はるゝ時の爽絶、快絶、蓋し人間界のものでない。常山溪へ着いたは湯治客が揚子くはへて湯殿へ出かける頃で、年來の知己たる宿の親爺に大そう早く來たと

寝められた。疲れと眠いとで晝頃迄寢。起きる早々温泉に飛込み、水合戦を初める、泳ぐ、相撲を取る、詩吟唱歌をやる。湯治客湯殿の戸口まで來ては、あきれて戻つて行く。たまには面白がつて我等の仲間に加盟する先生もある。此宿の親爺は若い時田舎相撲の關脇をやつたとかで、我等の顔見る毎に力自慢をするので、一番投げてやらうじやないかと晩飯後我等の座敷へ引つ張つて來て第一にM君(大學教授)かゝつて見事に投げられ、第二に權兵衛飛び付き腰投げをくふ。くやしいが我等の仲間に此親爺に勝つもの一人もない。宿の鼻息荒らげやつて來て『イ、年をして何の真似するんだ』と親爺にさめ付ける。親爺



小さくなつて隅へ引込む。鼻去れば再び始める。鼻又たやつて来る。

翌日午前は親爺の案内で茸狩りに行き、午後は魚釣りに出懸ける。親爺の釣つたものまでも我等が横領したので、親爺又たもや鼻に叱られて居る。氣の毒だと云ふので、魚を返しにいつたら田樂に拵らへて持つて来てくれた。

三日目よりは自由行動で釣に行く、山に遊ぶ、川で泳ぐ、しら玉せんざいを拵らへる、親爺にねだつて鼻の眼をかすめ、碌に熟しませぬ南瓜を湧き立つる温泉の中へ投込んで煮るなど、思ひ／＼に働いた。晩は宿り合せた祭文語りを親爺の寄附で、我等の部

屋で語らした。何を語つたか忘れてしまつたが、唯だ『三千世界に子を持つた親の心は皆な一つ』と云ふに至り、權兵衛不覺にも涙を落してみんなに笑はれたことだけは、今も尙ほ夢のやうに覺えて居る。

あゝ、此時のやうな楽しい清遊を何時いつ又た試みらるゝことだらう。

暮雲收盡溢清寒

銀漢無聲轉玉盤

此生此夜不長好

明月明年何處看

(蘇軾)



\*( \* \* \* \* \*)  
(三) 障子の隧道

螢雪庵の障子は、大抵其下半部に骨一本、紙一片をも留めて居るので、開閉の手數なく、自由自在に往來の出来る隧道仕組のものであつた。此隧道の長さは一哩の何百萬分の一だか勘定してみないと、一寸問はれても返答が出来かぬ程短かいものであるが、我等にとりて便利なることは、三哩何鎖とかあると云ふ日本一の笹子隧道。若しくは一生涯の間に一度通るか通らぬか分らぬ、アルプス横斷の九哩餘あるといふサン、ゴツタールの大隧道に勝ること數等で、實は專賣特許ものだと思つて居つた。

\*( \* \* \* \* \*)  
一たい、人は話をするにも話が見えないと興が乗らぬもの。滯して喧嘩が始まつたといふ時に、障子越しでは盲人が芝居見物をして居ると同様誠にあつけないものだ。殊に『オイ御馳走があるぞ』と隣室から呼ばれて、一刻を争ふやうな場合には、此隧道の便利なること實に計るべからざるもので、こんな時に建て付きの悪い障子をがたびしややつて居るものなら、他室の先生に先んせられ、後れ馳せに駆け付けた頃は、唯だ竹の皮や藁抜きの殻袋を見せらるゝやうな残念な目に遇ふ。  
こんな障子なら、有つても無くても、同じゝやないかと云ふ人もあらんが、之れでも無いと部屋のしまりが付かぬものじや。自





分の屋敷と隣りの屋敷との間には、たとへ破れ垣にしる垣の必要ある如く、部屋にも部屋の堺を標彰するものが必要である。或は體裁が悪いじやないかと云ふものもあらんが、總じて、物は見るものゝ考次第でどうとも見らるゝ。見る人の心々にまかせおき、高根に澄める秋の夜の月じや。此の様な障子も、障子の一種類だと思へば、少しも不都合はないと思ふ。權、兵衛家をなした障子には、少くも往來の頻繁なる部屋の障子は、此の螢雪庵式にしたいと思ふて居る。

求めなさは是れ至貴

足るを知るは是れ至當



\* \* \* \* \*

(三) 臺所の下駄ばき

お役所や學校などの玄關に『履草履の外昇降を禁ず』と云ふ  
揭示を出して置くは、權兵衛等の不平の一つである。下駄で昇  
降するが何故に悪いか。辨當ぶら下げ、泥路をてくくやつて  
來らるゝ御役人様方の泥塊然たる泥履でも、昇り口に一寸こす  
つたいけで、どこ迄も大威張で歩けるのに、如何に奇麗でも下駄  
では昇れぬとは、敢て偏狹なる國粹保存の考からではないか、下  
駄に對して同情に堪へぬ次第である。爾今よろしく、『下駄足  
駄の外昇降を禁ず』と改めて然るべき事と思ふ。



聞く所によれば文明諸國に於ては食堂でも便所でも、一足の履  
で自由自在に飛び廻れるそうだが、履よりも遙かに奇麗と少く  
も我等だけは心得て居る、下駄を、臺所にはいたからとて敢て仰  
々しく書き立てる程のことでもないが、こんなことにも螢雪庵  
一流の意氣が顯はれて居ると思へば、見逃しならぬやうな氣が  
する。一たい、螢雪庵の臺所は食堂兼帯で疊敷になつて居つた  
が其疊は長い歲月の間に垢と芥とで織り目も分らぬやうにな  
つたので、一と頃疊を剝いで板の間とした。處が間もなく前よ  
り一層穢くなり、一と度足を臺所に踏み込めば、元來餘り奇麗で  
もなかつた我等の足も、目立ちて眞黒になつてしまふ。それで

つらく考へたに我等が外を歩くに履物を穿つは、畢竟足を汚  
さぬやうとの趣旨に外ならぬ。さらば名より實を重んずる我  
等は、宜しく此趣旨を推し擴めて、穢き事外に一步も譲らぬ我臺  
所に及ぼすべしと、早速臺所を下駄ばきに改良したが、扱てそう  
してみると、臺所廣しと雖も、我等のさほど大きからざる尻をさ  
へ、すえべき所なく、低い飯臺の圍りに下駄ばきで、かゝんだり立  
つたりして飯を食はざるを得ざることゝなつた。然るに慣れ  
ぬせいかな、どうも飯が腹に落ち付かぬ。困つては改むるに憚る  
勿れだと、再び元との穢き疊を敷き詰め、下駄ばき中止といふこ  
とにした。物は理窟通りにいかぬものである。



(三) 馬糞の誓

我等の同級生に薄野遊廓へ通ふものがあるといふ。制裁を加へずんばあるべからずと、折り柄催された忘年會の歸途に要撃した。『貴様は薄野へ通ふぞうだがほんとうか』と詰問すると、顔色變へて、『どうか許してくれ、今後決して行かぬから』と云ふ。『イヤ貴様のやうな腐腸漢の言など當てになるものか、我輩は今小指を切るから此血を啜つて誓をたてよ』と云へば、『どうかそれだけは許してくれ』と云ふ。そんなら之れを喰つて誓の徴にせよとて、ひりたてらしい馬糞をつかんで突き付ける

と、まづさうな顔してむしやく之を食ふ。あきれて物が云へぬ。こんな意氣地なしを殴つたところが手柄にもならぬので、『今後行くと承知しないぞ』と云つて別れた。此先生間もなく退校して、一時其の消息を詳らかにしなかつたが、今より六年前に、頗る壯大なる三階建の煉瓦家一ぱいに、英語で『〇〇氏 齒科病院』と大書せる家の繪はがきを送り來り、『僕も馬糞を食つたお蔭に今日あるに至つた、此恩は長く忘れはせぬ。僕の病院は桑港を去る僅か何哩の何市にある。幸に食ふには困らぬ。どうか觀光かたゞ遊びに來てくれたまへ』と來た。慚愧恐縮の至りである。



\* \* \* \* \*  
螢雪庵仲間には學校に於ても常に活動の中堅となつて、随分突飛  
な思ひ切つた藝當をやつたものだ。今時のおとなしき學生諸  
君を煽るやうに思はれては、甚だ心外の至りであるが、どうぞ、こ  
んな馬鹿な眞似をなさらぬやうにと、ことわりを前置きに、二三  
の事件を述べてみる。



(三) 教室の人造雨漏り

\* \* \* \* \*  
札幌農學校の豫科講堂火を失して、丸焼けとなり、一と頃我等は  
農園内の傳習科寄宿舎の一隅に、授業を受けて居つた事がある。  
此建物たる極めて古く、暗く、穢く、おまけに一種の異臭鼻をつき  
だまつて居ては病氣でも出そうなので、何分にも活動せずには  
居られなんだ。或日試みに長腰掛を以て天井を突き上げると、  
天井板は苦もなくはづれて大穴が明いた。早速机を積み重ね、  
天井に上り、下から雪を遞送して、先生の席上一面に雪を擴げ、素  
知らぬ顔して盛にストーブを焚いたので、歴史受持のN先生の



ビール樽然たるづうたいの上に、雨漏が始まつて来た。先生右へ避け、左によけらるゝも、『猶は袖ぬらす松のした露』然と、ますます盛にやつて来るので、たまり兼ね、勿々に授業を切り上げて歸らる。萬歳の聲、拍手と共に起つたは勿論である。更に露骨で、而かも一層猛烈な遣り方は、或日窓外より教室へ打ち込んだ雪が、汚き床一ぱいに散らばつて薄墨色となりしを、すき間なく天井に打ち付たことである。(勿論自分等の席上だけは取り除けて、英語受持のK先生、本を小脇に悠然やつて來らるゝと、インキ同様のしたゝれが頭と云はず肩と云はず盛に此先生を汚し奉る。先生は例の雨漏りと深くも氣に留めず、物に動

せぬ御體度で授業を續けて居られたが、飽迄徒らものゝ點滴は、先生の額より頬にかけて黒線を引けるを、先生は又た御丁寧にも手の平で之をこすられ、其青白き顔の半面を薄黒く化粧せられた。事茲に至りては、我等も吹き出さるを得ぬ。先生恠みヒョット天井を見ると此始末なので、奮然扉を排して出て行かれた。拍手喝采の聲、教室を振るはすと云ふても決して大げさではなかつた。

おこたらず行かば千里の果もみん

牛のあゆみのよしおそくとも



\* \* \* \* \*

(三) 先生のゞ出し

漢學受持のY先生が教員室より出て來らるゝ頃をはかり、五六人戸外より、七八人教室内より、入口の戸の押し合ひを始めた。先生來られて戸を叩き、『私です、私です』と頻りに叫ばるゝも、『先生のこわいろをやつてやがる、そんなことで騙されるものか』と決してゆるめぬ。戸外のもは先生に忠義顔に、『オイ先生だぞ、あけるく』と呼ばはるも、『うそつけく』と答へてどうしてもあけぬ。先生止むを得ず一と先づ歸られ、暫くして出直さる。然し三十分ばかりは遊べたとて一同大喜び。

\* \* \* \* \*

(三) 今日はまだ教へません

K先生英語の時間に、一同申合せ何を問はれても知らぬくと答へる約束をした。處が、愚按するに、其日はあいにく先生も下た読みをして來られなかつた様子で、何とか云ふ一字を誰に問ふても忘れたと云ふので、先生頗る當惑のてい。やゝ久ふして『今日はまだ教へません』と出て行かれた。當意即妙の先生の此お仕打ちには一同感服の外はなかつた。

哀れいかに霞も花もなれくゝて

空しく谷に歸る鶯



(元) 雪投げ

雪の細道を一列になつて、後の者は雪をつかんで前の者に打ち付けつゝ、雨天體操場より歸る折り、快活な軍人上りの體操先生も、ちよつと之を真似られたが騒動の元で『そら先生も投げたぞ』と一同振り返り、先生目がけて雪投げを始めた。先生も負けずと應戰甚だ力められたが、何分にも多勢に一人りで、目鼻も明けて居られぬやうな状態ありさま、おまけに終には雪中に倒され顔頭の嫌なく握り雪を打ち付けられ、烈火の如く憤つて校長室へ飛び込み、學生に手込めに逢ふたと訴へられた。こは容易ならぬ

事なりと、早速我等を呼びに來た。校長は儼然と、我等に『何故そんな亂暴をするのか』と問はる、『イヤ何も亂暴は致しませぬ、雪合戦をしたのであります』然らば先生も投げられたか』『ハイ抑の始まりは先生にあるのです』と答へると、校長は意外と云ふ顔をして事實をたゞされ、『雪合戦とありては有勝ちのことなれば、御ふしやうあつて然るべし』と先生に云はれ、我等には『爾今粗暴の舉動を慎むべし』とて事なく濟んだは痛快であつた。

或る日五六人、二た手に分れて雪投げをやつて居る所へ、物理受持のヘート先生がやつて來られた。M君ベースで鍊へた手練



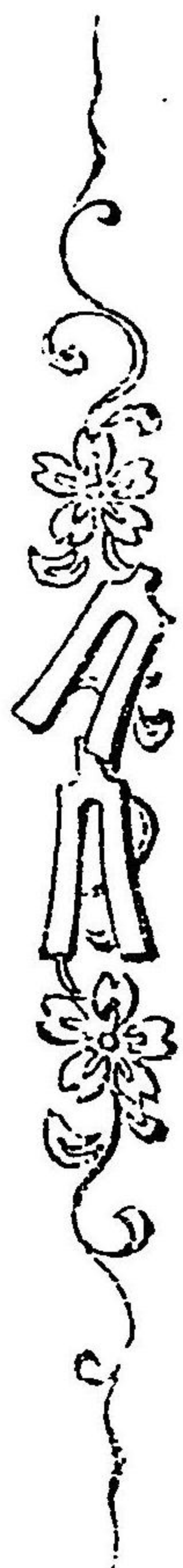
で投げた一丸は、見毎に先生の山高帽に的中し、二三間向へ投げ飛ばした。先生こちらをにらんで黙つて立つて居らるゝ。M君早速駈付け、帽を拾ひ上げ、ブロークン、イングリッシで頻りとあやまつたが、其學年の試験點數には、たしかに影響あつたやうだとのことであつた。

(四) 螢雪庵の寂滅

始めあるものは終りあり。螢雪庵も庵主萬宗和尚の引導で愈々寂滅と決定した。長きは六年、短きも一年有半、共に一ツ鍋の飯を喰つた我等、折柄の秋の木葉のやうに散りく、ばらくと思ひくの下宿を尋ねて袂を分つに、豈多少の感慨なきを得んやである。随分喧嘩もした。反目もした。然し分るゝとなるとお互の我も折れて、『君僕は實に失敬した、赦してくれ玉へ』と、涙ぐんで手を握り合ふ。『ドーダ別れに蕎麥でも取らうじやないか』と相談一決例に似ず、『君も一ツやり玉へ』と譲り



合ふて喰ひ終り、失敬、失敬と茲に樂しかりし自炊生活の終りを告げた。生者必滅、會者定離。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。



\* \* \* \* \*

明治四十三年六月十八日印刷  
 明治四十三年六月廿一日發行



著者 種蒔權兵衛  
 東京市日本橋區鐵砲町三番地  
 發行者 會社六盟館  
 代表者 杉本七百丸

印刷者 高塚慶次  
 東京市京橋區町三十四番地

(不許複製)

(定價金參拾錢)

發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地  
 會社六盟館  
 電話浪花特長二七六五番  
 振替口座東京二二五五〇番

大販賣所

東京市京橋區南傳馬町三丁目 目黒 甚七  
 東京市日本橋區鐵砲町 榊原 友吉  
 東京市日本橋區本石町二丁目 杉本 七百丸  
 新設區長岡市天四ノ丁 目黒 十郎  
 長野縣長野市大門町 西澤 喜太郎



簡野道明序 佐藤正範校

(紙數四百五十ページ)

好評  
三版

伊藤仁齋  
先生述 論語古義

洋裝美本 定價金六拾五錢  
總洋布製 送料金六錢  
全一冊

◎論語釋義中の隨一・常識修養の好資料!!

國學院大學明治大學  
高等師範學校講師 佐久間信恭著

好評  
三版 英語おもちゃ箱

洋裝四六版 特價金五拾錢  
全一冊 送料金六錢

好評  
再版 數學おもちゃ箱

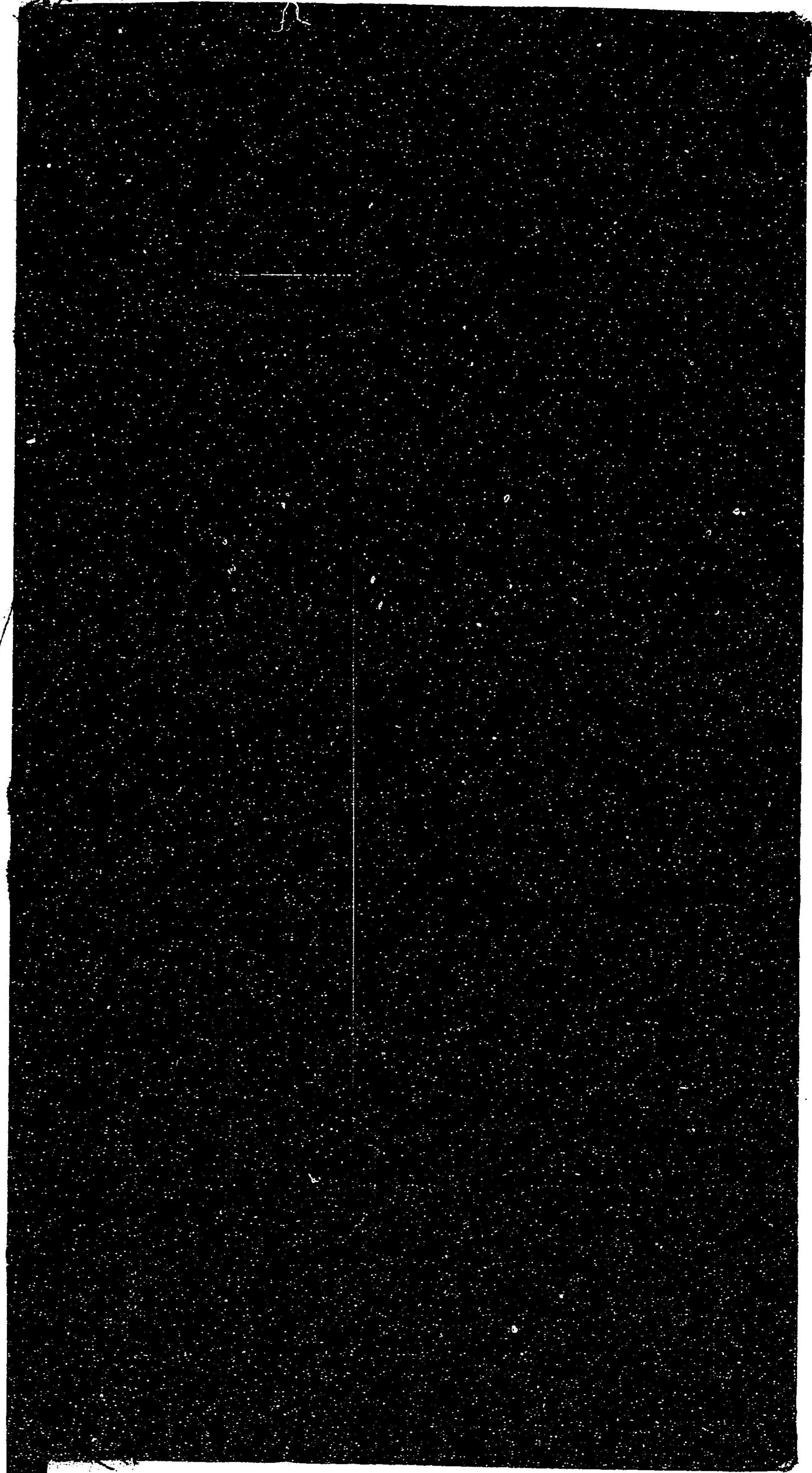
洋裝四六版 特價金五拾五錢  
全一冊 送料金六錢

◎學生・教員・高級受験者の寶典!!



25  
947







25  
947

049093-000-5

25-947

二十年前の学生自炊生活 蛍雪庵思い出の記

種蒔 権兵衛 / 著

M43

BEK-0076





